

幼稚園から大人まで「ひとつながり」の、
本当に大切な学びを求めて。

2021
Mar. 発行

2020年度
学校法人 北白川学園「山の学校」クラスだよりと
エッセイ

山びこ通信

北白川
幼稚園 p.33

小学生 p.3

中・高生 p.14

大学生・一般
p.19

真似ること

山の学校代表 山下 太郎

子どもは模倣や真似が大好きです。模倣は尊敬の別名であり、子どもたちは何かに憧れ、何かを尊敬したくてたまりません。それは人間として本来備わっている「真・善・美」を追求する欲求に合致した自然なことだと思います。まずは憧れの気持ちから真似を繰り返すこと、その先に創造が生まれるということ、この順序が重要です。これは言葉による表現にせよ、絵画表現にせよ、原理は同じです。

「表現」は英語の expression の訳語です。語源に即して言えば「力が加わった結果、何かが外に絞り出される」というニュアンスです。その反意語は impression で、日本語では「印象」と訳されます。英語の綴りをよく見て下さい。ex (外に) と in (内に) が、各々逆の方向を示しています。pression は、プレス (押す) と関係しています。

ミカンが目の前にあるとし、それを両手でぐいっと絞ります。これが「インプレッション」のイメージです。ある一定以上力を加え続けるとミカンの皮は破れ、果汁が外に向かってほとぼしります。この「ほとぼしり」が「エクスペッション」であり、「表現」です。今述べたことは、真似から入り創造に至るプロセスと同じです。感動的な対象が心に「刻まれる」経験を重ねるとき、必ず魂のほとぼしりと言うべき「表現」が生まれます。

私の園 (北白川幼稚園) では週に二回、年長児に俳句の素読を行っています。正座をして向かい合い、私が初句を声に出せば子どもたちは耳で聞いた通り声を合わせて返します。二句も同様、結句も同様。こうして全員で芭蕉や蕪村の俳句を何度も声に出すうち、自然に暗唱できるようになります。それに加えて、誰からともなく俳句を作って持ってきます。これは上で述べた「ほとぼしり」の第一歩と言えるでしょう。

素読のよいのは文字を使わない点にあります。聞いた言葉を繰り返すのは幼児にもできます。素読の本質は真似ることにより、意味は教えません。一つの俳句について何十回と声に出すことで、子どもたちは自然に言葉のリズムや姿にふれ、心に豊かな風景を描きます。重要なのはお手本としての古典の存在であり、芭蕉や蕪村の作品は安心して子どもたちに紹介できます。子どもたちの感性は本物に敏感で、誇らしく朗唱を続ける姿は圧巻です。

「印象」と「表現」の関係で言えば、手本の言葉を何度も繰り返すことで、子どもたちは未来の「表現」の糧を蓄えていきます。それがいつどういう形で「魂のほとぼしり」となって表れるか、それは将来のお楽しみです。子どもたちは元来誰もが感受性豊かであり、誰もが「真」なるものを模倣したいと目を輝かせています。その目を曇らせぬためにも、大人は子どもたちの「表現」に一喜一憂するよりも前に、彼らを取り巻く環境が、模倣に値する「手本」を含むかどうか、常に注意を払うべきだと言えるでしょう。(山下 太郎)

● 北白川幼稚園 お山の絵本通信 より 副園長 山下 育子

『ダーウィンの「種の起源」はじめての進化論』

サビーナ・ラデヴァ / 作・絵、福岡伸一 / 訳、岩波書店 2019年

p. 33

巻頭文

クラス一覧

(2021年3月時点)

★印は新規開講

※最新情報は、ホームページ
でご確認下さい

●小学生 …… 3~13、16

しぜん かいが つくる 将棋教室
ことば 西洋の児童文学を読む A
かず れきし ……16

●中・高生 …… 14~19, 30

西洋の児童文学を読む B 西洋古典を読む
東洋古典を読む ……★新任 (p.16へ)
英語で学ぶ歴史と文化…★(右記) 歴史
中学英語 中学数学
高校英語 高校数学
教養数学
「数学ガールの秘密のノート」を読む

●大学生・一般【語学】 ……19~30

ラテン語 ……★(右記)
ギリシャ語 ……★(右記)
漢文入門 ……★新任 (p.22へ)
韓国語 ……★新任 (右記)
フランス語 ……★(p.24へ)
イタリア語
ドイツ語 ……★(右記)
現代ギリシャ語 ……★ (p.26へ)
ロシア語 ……★(右記。「講読」は p.26へ)
英語講読 ……27
教養英語 ……★新任 (右記)
英語で味わう
シェイクスピアのソネット
ディケンズ「ボズのスケッチ」を読む
…★(右記)

●大学生・一般【ゼミ】 ……29~32

調査研究
イベント告知「ツイッターに求める安心」
日本文化論を読む
医学哲学講義 ……★ (p.29へ)
西洋近代思想の古典を読む ……★ (p.32へ)
現代社会を考える
(MMTを理解する) ……★ (p.32へ)
経済 ……★ (p.32へ)
現代世界史 ……★(右記)

真似ること …… 1

あとがき …… 36

● 関連記事

- ・『ダーウィンの「種の起源」はじめての進化論』
(お山の絵本通信より) …… 33
- ・園庭“ひみつの庭”で子ども達が出会ったチョウ
(Ikuko Diaryより) …… 35

★ 新規開講情報

やさしいラテン語入門

テキスト：『初級ラテン語入門』 有田潤 著 (白水社)

初めてラテン語を学ぶ方へ向けた、より入門的なクラス。1年ほどで、簡単な文章を読めるようになるための基礎を身につけます。

ラテン語初級 (週1コマコース/週2コマコース)

テキスト：Hans H. Ørberg, *Lingua Latina per se illustrata pars I: Familia Romana*.

初学者向けにラテン語だけで書かれた教科書を用いて、文脈のある面白い物語を読み、理解と表現を繰り返すことで総合的なラテン語の力を身に付けることを目指します。

ラテン語初級文法 テキスト：『ラテン語初歩 (改訂版)』 (岩波書店)

ご要望に合わせて、テキストを1学期間(12回)、または2学期間(24回)かけて一通り学びます。

ギリシャ語初級文法 テキスト：『ギリシア語入門 新装版』 (岩波書店)

1年間を目安に、テキストを一通り学びます。

韓国語初級 テキスト：『文法がしっかりわかる韓国語』 (池田書店) (予定)

韓国語が全く初めての方、ちょっと習ったことのある方が対象です。文字を覚えることから始め、韓国語の仕組みを理解し、基礎的な文法を身につけることで、簡単な韓国語を無理なく読み、話せるようになることを目標にします。



韓国語講読 A テキスト：金承鈺『霧津紀行』

韓国語の美しさを極大化した本作品は、韓国語の学習だけではなく、1960年代の韓国社会の雰囲気味わう上でも、一読の価値がある作品です。

韓国語講読 B テキスト：カリール・ジブラン、姜恩義訳『預言者』

韓国語訳の文章は簡潔で平易ですが、そこに含まれている意味を吟味しながらじっくり読んでいきます。

ドイツ語初級 / 講読 初級では、基礎的な文法や語彙を別棟することで、辞書があれば簡単なドイツ語の文章を読めるようになることを目指します。講読では、ドイツ語で書かれた様々な文章を読みながら中級文法や語彙を学ぶと共に、ドイツ語圏文化の豊かさに触れていきます。テキストはカール・ラートゲン『日本人の国家と文化』他、小説・翻訳・エッセイなど応相談

現代ギリシャ語初級文法 文法・会話・講読など、幅広く対応しています。

ロシア語入門 テキストは『名作に学ぶロシア語』(ナウカ出版)を予定。

英語で学ぶ歴史と文化 (中3~高校生)

テキスト：A History of Britain 「英語を読む力」、「日本と海外の歴史と文化の違いを踏まえるための基本」の両方を、簡単な文章で書かれた英語の本を読むことで鍛えていきます。



教養英語

テキスト：Alister McGrath, *Christian Theology*

知的な読みものに英語で親してみたい方を歓迎します。テキストは、Alister McGrath の *Christian Theology* 第6版から適宜選び、重要主題に触れていただく予定です。

英語講読 ディケンズ「ボズのスケッチ」を読む

テキスト：Charles Dickens, *Sketches by Boz*

ひとつの作品はどれも5ページ前後の長さですが、どれもユーモアと皮肉とがたっぷり効いていて若いディケンズの作家としての意気込みを感じさせます。ある程度の難しさの英語の小説を自分ひとりで読めるようになることがこのクラスの到達目標でもあります。

現代世界史 19~20世紀の歴史を扱う研究書を批判的に読んでいくことで、現代の国内外の様々な情勢を複眼的に理解できるようにします。

5つのクラスそれぞれが、頭と体を働かせ、森での活動を中心に、のびのびと過ごしています。森の探検、ひみつ基地づくり、ロープを使った遊び、小さな焚き火を囲むなど、それら「定番」とも言える取り組みが毎年のように繰り返されるのは、そこに尽きることのない新しい発見があるからだ、子どもたちの様子を振り返りながら、改めて実感しています。

また、それらの取組はどれも流動的に繋がっていて、季節のもたらしてくれる刺激と、子どもたちの内側から湧き出るアイデアとが結びつき、「化学反応」を起こしながら、うねるようにして、各クラス独自の時間が流れていきます。

いきものたちとの出会い

今年度は、子どもたちの間で昆虫採集熱が高まっていました（特にA、C2）。というのも、6月スタートとなったため、例年なら夏休みにあたる7月後半から8月にもクラスを実施したからです。「クワガタ見つけたい!」「トラップを仕掛けてみようよ!」

特に男の子たちの中では、人気昆虫の代表格、カブトやクワガタに出会えるはずだという期待が高まっていました。

バナナや砂糖、梅シロップを作った際に余った梅などを使った手作りのトラップには、山のようにカナブンが入っていることもありました。カブトやクワガタには最初、なかなか出会えませんでした。しかし、時間が経つにつれ、トラップすら必要ないほど、樹液の染み出した木の幹には種々の昆虫たちが賑わい始め、夢中で汁を吸ったり、時折激しく牽制しあったりする姿を見ることが出来ました。お目当ての昆虫を手に取り子どもたちが大満足したことは言うまでもありませんが、息を呑みながら、命の賑わいを至近距離で眺めることが出来たのは幸運でした。



雨天も多く、そんなときはダンゴムシを集めてきて、連続T字路の迷路を歩かせる実験観察をしたり、カツムリを集めてきて観察したりしました。ダンゴムシに迷路を歩かせる実験は、2年ほど前から取り入れています。今回は迷路そのものを子どもたちが考えて作り始めました(D)。また、「カツムリの家」と称して飼育ケースの中に折り紙の家を入れておいたら、次に見た時は穴だらけになっていました(C1)。

あるときBクラスのKouya君が、教室に来る途中で弱っている蟹を見つけ、連れてきました。もう殆ど動かず、指で触ると簡単に背中中の甲羅が外れてしまいました。顕になった蟹の「中身」をしばらく観察していたときです。「あれ?動いた?」中央に小さく点のように見える部分が、微かに「ピクッ」と動きました。しばらくしてまた、「ピクッ」…。それは、心臓の律動だったのです。死と生とを同時に見つめるような不思議な気持ちを共有しながら、しばらく皆で眺めていました。

森の探検から創造へ

「探検」の2文字は、しぜんクラスの軸とも言えるかもしれません。ちょっと足を伸ばして出かけた先で、「未踏の地」に辿り着き、そこから見える美しい山並みの景色に歓喜する、といったことが、何年経っていても無くなりません。また、見慣れた道も、一步脇に入ってみると、こんなにいい場所があったのかと気づくことがあります。「ひみつ基地にいいね!」ということで、早速基地づくりになったり、或いはドングリや落ち葉、かっこいい形の木片、蔓など、行く先々で集めた「森の落とし物」で、工作が始まります。俳句を考えながら歩き、木の葉に綴る子もいました(C2)。昨年度からは、粘土質の土を探して採取し、粘土を精製することが各クラスでブームです。このように、探検を起点として芽づる式にいろいろな取組に発展していきます。

また、探検に出かける際、ロープを携えていくのもよいです。何とんでも木の枝に引っかけてぶら下がろうと皆で試みた時間がありました。丈



夫な太い蔓を見つけ、そこにロープを下げてみると、蔓を揺らすとロープも大きく揺れる、スリル満点の世界に二つと無い遊具が誕生しました (B)。また、滑るは一瞬、登るは一苦勞の斜面を、木に垂らしたロープを点在させて、ロープからロープへジグザグつたって登る遊びを 1 年生たちが発明していました。「目を瞑ったまま歩いてみたい」との発案から、友達が引くロープを頼りに森を歩く人もいました (A)。

今年度は雨のため、室内で過ごす時間も多かったですが、それでも創作の意欲は衰えませんでした。D クラスでは、T 君が、漢字表記された生き物の名前を当てるクイズを自主的に家で作ってきてくれました。このクイズ熱がみんなにも伝わり、やがて皆がクイズを持ち寄るようになり、新定番のコーナーとして大いに盛り上がりました。このようなアプローチでしぜんに親しむのも大変有意義であると皆に教えられました。

私も色々出題しましたが、ある時は「里山の手入れ」に関する問題を 3 つ出しました。



「Q1. 切り株などから細い枝が放射状に伸びたものを『ひこばえ』と言いますが、そんな木を丈夫に育てるには？」これはすぐに答えが分かります。丈夫そうな枝を残して他を間引きます。「Q2. では、それが斜面に生えている時、斜面の上側、下側、どちらの枝を残した方がよいでしょうか？」「Q3. 落ち葉が積もっていると、良いことと、良くないことがあります。それぞれ何でしょうか？」皆さんにも考えて頂ければと思います。

皆でかき集めた落ち葉では「お風呂」を楽しみ、心して鋸を入れた木の枝や、間引いた竹林の竹は、ひみつ基地づくりや工作に活かされました。

このように、しぜんがもたらしてくれる恩恵を存分に享受しながら、しぜんへの感謝と親しみが育まれていくことを期待しています。



今年度も、クラスに集まったひとりひとりにとって、今何が最も適切かを推し量りながら、課題の内容や流れを決めていきました。

A クラスは、写生が中心となりました。生徒さんはWちゃん一名で、彼女にとって今一番の関心事は、草花や虫、木々と触れ合い、ひたすら観察することのようでした。

例えばある時は、黄金色に染まった銀杏の木を見上げて描き、時々おもむろに、木の裏側に駆けていって、ふむふむと頷いて、また元の位置に戻って描くことを繰り返していました。

銀杏の色合いは、日の傾きとともに刻々と変わっていき、やがて日が沈み、銀杏の木も、手元もはっきり見えなくなる、クラス終了間際まで描き続けていました。

また別の日は、植え込みの中にひっそりと咲く白い八重咲きの椿の花を描きました。白い画用紙に、白い花をどのように描けるかは、なかなか難しい問題です。一緒に観察しながら、何故この花が「白い」花に見えるのか、そして、白とはいつでも、どんな白なのかを、対話をしながら一緒に観察しました。

よく見ると、花びらの中には濃緑色の葉の色を映し込んだような微かな緑色や、夕焼けの光が透けてできた仄かな薄橙色など、様々な色味があることに気づきました。

Wちゃんの一心不乱な眼差しを通し、描くことの原点を思い起こさせてもらった気がします。



上記5枚は生徒による写真作品

B クラスにおいては、今年度前半、思い思いの自由課題制作が中心となりました。コロナ禍で、少なからず窮屈な思いを強いられているので、思いのままに制作することで、心をほぐし解き放つことに繋がればと見守りました。

年度後半からは、それぞれが決めた課題を突き詰めることを目的に掲げ、幾つかの選択課題を私からも提案しました。

その中で、インスタントカメラを用いた課題を今年も皆で実施することになりました。今回は、単に構図にこだわって面白い画作りを試みる、というだけに留まらず、カメラの仕組みとその歴史にも大まかに触れました。

真っ暗な部屋の壁に空いた小さい穴から外の光が差すと、反対側の壁に外の景色が投影される、いわゆるピンホールカメラの原理については、古代から現象的に知られており、やがてその解明と試行錯誤の結果、機器として発達していきます。この過程で生まれた「カメラ・オブスクラ(ラテン語で「暗い部屋」の意)」と呼ばれる装置が、今あるカメラの原型で





もあり、また、画家が景色を写し取るために使われたことは、「見ること」や、「描くこと」、その意味について考える上で見逃せません。(特に昨今、何でもパッと写真を撮って、満足してしまう、という経験を、少なからず誰もが経験しているのではないのでしょうか?)

カメラ・オブスクラを用いて描く擬似的体験として、「撮り終えた写真を、敢えて模写してみる」という課題を提案しました。現在、まだ2~3人が取り組み始めた段階ですが、そのプロセスで、早くも色々な発見があったようです。

描きあらかわすことも、写真を撮ることも、眼前の何か素敵なものを、自分のものにしたい、ずっと留めておきたい、という純粹な欲求から来るのかもしれませんが。

しかし、自己の欲求だけが制作の原動力ではないことを示してくれる例もあります。Hちゃんは、頻繁に、小学校の催しでお友達と使うものや、皆で楽しむためのカードゲームを自作していました。

またある時は、仲良しのSちゃんと共に、「まだ見ちゃだめ」といって、園庭で何かを企てています。「いいよ」と言われて渡された紙には、絵や文字で、暗号のように、謎と、謎を解くためのヒントが用意されており、何段階かの謎を解いていくと、園庭の何処かに隠された「宝」に辿り着くというものでした。途切れなくワクワク感が続き、最後に宝を発見した時には言いようのない感動が待っていました。(宝は、その周辺には落ちてはいるはずのない綺麗な落ち葉であったり、折り紙で作った何かであったりしました。)

彼女たちが作ったこの「作品」は、受け手を積極的に引き込むインスタレーション(物だけでなく、空間や行為も含めて作品とする芸術の様式)とも言え、人の心に大きな作用をもたらす立派な芸術作品と言えます。

その他の例として、版画を沢山刷って自信をつけてきたSちゃんからは、「小学校に飾ってもらえた!」「家族にあげて喜ばれた!」といった声も聞かれましたし、お母さんにあげるプレゼントを入れるための箱を内緒で作るYちゃんの姿などがありました。

ものごとをよく見たり、見方について考えたり。喜んだり、喜ばれたり。心を解き放ったり。他にも、描くことの動機や意味は、描く人の数だけあるでしょう。そのような多義的な営みとして絵画行為(描くこと、ひいては表現すること)を捉え、これからも皆さんを見守り応援することができましたら幸いです。

『つくる』1~2年

担当 山中 杏朗

本年度はコロナウイルスの影響で6月からとなったものの、幸いなことに体調不良による欠席もなく開講しております。

春学期開講前に、工作するときの環境について考えていました。工作自体は山の学校に限らず学校やご家庭でもできる取り組みです。学校では、図画工作の授業や休み時間に同級生の子と話し合いながら取り組むことができます。また、ネットや小売店を通して丁寧な説明書がついたキットを容易に入手できるようになり、それぞれのご家庭で時間を気にせずに取り組むこともできます。

昨年度の山びこ通信では、『つくる』について「他の受講生の作品が出来上がるまでの過程を見ることができるため、受講生自身が思いつかなかったような工夫に触れることができる貴重な機会」と書きました。これは、同じ部屋で作業をするものの、取り組む内容が異なるからこそ生み出される空間であり、受講生が互いに影響を及ぼしあうことで(講師はそれを促す、俯瞰して見つめるようにすることで)初めてできるものだと考えております。『つくる』では、受講生にとって(講師にとっても)予測できないことが日々発生し、家庭や学校での工作の取り組みにはない不思議な空間を形成しているように思えます。授業が始まる前に「今日はこれを作ろう」と考えていても、授業中に別のアイデアがわいたときにはそれに組み込み、17時20分ごろには当初の計画とは別のものできることもよくあります。それは、他の受講生の影響や山の学校に来て初めて見たものの影響によると思われるのですが、実際に行動することができるのは、好奇心だけでなく、内容は違っても同年代の子がどのような結果になるかわからない課題に取り組んでいることに心強さを感じているのかもしれませんが。

今年度は、モーターを用いた工作でうまく動かないことに対して、配線や歯車、電池を確認したり、ダンゴムシ



のための迷路を作る際には道幅や壁を乗り越えないかについて話したり、お菓子の空き箱や新聞紙でできた作品を中心に広がるストーリーを共有したり、私自身も様々な世界を窺うことができました。

受講生の皆さんには、山びこ通信で掲載する写真とは別に、各学期末に授業風景の写真をお渡ししております。これは、山びこ通信が年1度の発行になってから始めたことですが、受講生自身が作品を仕上げるために道を拓く様子、完成した際の様子を選んだつもりです。写真を見返したときに製作過程のこと、完成した作品で遊んだ時のことを思い出したり、家族の皆さんと話したりしていただけたら幸いです。

『ひねもす』(つくる4~6年) 担当 福西 亮馬

シンプルにするほど、奥が深くなるものがあります。たとえば将棋です。大昔には「大将棋」というものがありました。盤は15×15、駒は130枚。ロマンに溢れていますが、「一局指せばもう十分」と思う人が大勢を占めるのではないのでしょうか。なぜなら、将棋の面白さは手を読み合うことにありますが、それが大将棋ではほぼ不可能だからです。そこで、将棋はその後、簡略化を重ね、現在の9×9、40枚の形に落ち着きました。その人気の高さは言うまでもありません。奥深さが、複雑よりもシンプルを目指して得られた例です。

昨年度から、クラスの内容を「ひねもす工作」一つにしました。ひねもす工作では、「切る」と「穴開け」の二つの作業から、さまざまな形が作れます。そして、意図したものが完成するまで、何時間でも取り組みます。作業そのものは単純で、面倒くさい点をのぞけば、継続可能だからです。実際、面倒くささよりも問題となるのは、ゴールに至る道筋、形の本質を見抜くことです。それが見抜けなければ、どうやっても不可能だからです。そこには将棋の「詰み筋を見つけること」と似た楽しみがあります。また、部品をさらに部品化して、もうこれ以上部品にできないというところまで掘り下げる必要性が出てきます。それが、ひねもす工作だと言っても過言ではありません。そうやって一から部品化し、組み立て、完成したときの喜びは、次の創作意欲にもなり、好循環が生まれます。

あと、ひねもす工作に必要なものは、時間です。実際には忙しいけれども「忙しい」と口にせず、時間をいかに調達できるかにかかっています。そのための取っかかりは、「シンプルであること」です。もし世の中に、複雑なもののためにより複雑なものを準備して悪循環に陥る流れがあるとしたら、われわれはその「逆」を行きましょう！





『将棋教室』

担当 中谷 勇哉

ここ半年ほどは N 君と角落ちや飛車香落ちで対局しています。一般にそうなのですが、N 君も攻めが強く、角落ちでは私が負けることも多くなりました。特に最終盤の力が強くなり、以前に課題としていた自分と相手の詰まされるまでの差（速度計算）を見極められ、こちらの勝負手を無視（将棋では「守ると逆に相手の攻めが成立してしまう」ということがあるのです）されて攻め潰されたときは、成長を感じました。

学期ごとに開催する将棋道場では、毎回4、5人の参加者で総当たり戦を行っています。「棋は対話なり」という言葉がありますが、様々な人と将棋を指すことで、相手の気持ちを考えたり、自分の意見をどのように伝えるかという力も養っていかれたらと思っています。



『ことば』1年

担当 福西 亮馬

字を読むこと。広い世界を垣間見ること。人の心の機微を知ること。ストーリーの展開に驚くこと。本にはじつにさまざまな心の栄養と経験がつまっています。

このクラスには1年生2人が受講しています。2人とも本が大好きあることは、その音読でわかります。引き続き、本との出会いを見守るクラスとして、内容確認のプリント、音読、テキストの選択の3つに心を砕きます。

ふりかえると、幼年向けの児童書を毎週1冊ずつ読んできました。年間で30冊を越えます。シリーズものだけを抜き出すと、下記のとおりです。

『みちくさ一年生』（あまんきみこ、講談社）（全5冊）

『ふたりはともだち』（アーノルド・ローベル、三木卓訳、文化出版局）（全4冊）

『リトル・グレイラビット』（アトリー、箕浦万里子訳、偕成社）（全8冊）

『こぐまのくまくん』（ミナリック、松岡享子訳、福音館書店）（全5冊）



とくに、ローベルのがまくんとかえるくんシリーズは、読み聞かせだけでなく、自分で読むタイミングでもおすすめです。おそらく、学校の教科書に掲載された『おてがみ』で知ることが多いのですが、そのほかの短編も味わい深いです。4冊しか出ていないことが惜しいくらいです。

つぎに読むテキストを紹介します。『クマのプーさん えほん』（ミルン、石井桃子訳、岩波書店）（全15冊）です。原作から幼年向けに分冊化されたものです。ただしそれほど縮約されていないため、言い回しにむずかしいところがあります。それをかみくだきながら読みます。読み聞かせで知っている人にも、新しい発見があると思います。お楽しみに。

『ことば』2~3年

担当 福西 亮馬



2019年2月から『黒ねこサンゴロウ』（竹下文子、偕成社）のシリーズを読んできました。この稿を書いている時には、第10巻に入りました。最終巻です。

サンゴロウは、記憶喪失でありながら、船乗りとして自立しています。事件に巻きこまれても、権力にはおもんねらず、暴力には冷静に対処します。一方でおせっかいなことはせず、「それは彼らが考えることだ」と突き放すこともしばしば。生き方を押しつけることも、押しつけられることもない。そこが魅力でした。サンゴロウのマリン号の旅もいよいよ終わりに近づきました。シリーズものを読み終えるという達成感をぜひクラスで味わいましょう。



つぎのテキストを紹介します。『ポリーといはらべこオオカミ』（キャサリン・ストー、掛川恭子訳、岩波書店）のシリーズ（全3冊）です。「赤ずきん」をはじめ童話のパロディで構成されています。思わず音読したくなるようなオオカミのセリフ。ページをめくることがとにかく愉しいです。作者は自分の子どもたちに読み聞かせるために書いたといいますが、頷けます。文字や声から自分の想像力でイメージすることを応援してくれる作品です。

本読み以外の時間では、主に俳句を暗唱しています。年間で50ずつほど紹介し、昨年度からの生徒には100になります。たとえば以下は田中裕明（1959-2004）という人の句です。

水遊びする子に先生から手紙 田中裕明

初雪の二十六萬色を知る 田中裕明

田中裕明は45歳で亡くなりました。1句目は、家の前に出されたビニールプールでしょうか。「先生からよ」という母親の声。手紙を受け取る前に、とっさにぬぐう手のしずく。2句目は、工学部出身の作者が顕微鏡をのぞいた時のことでしょうか。それともRGBで表せることを言ったものでしょうか。映像化は読者の想像にゆだねられます。

俳句は世界最小の詩です。五七五では何も言えないのが本当のところ。だからこそ、愛唱するたくさんの読者の想像力によって「ますます」完成します。その意味で、掲句は、読者のいる限り、いつまでもみずみずしさをたたえていることでしょう。名句か否かは作者ではなく読者が決めるのです。そのような俳句の魅力を、受講生と共有することができれば幸いです。

「王子さまへ、私は王子さまに、見えない物こそ大切ということに気づかされました。私は、見えている人、物、その人が言った言葉だけを見ていろいろ言っていたけれど、その言葉のうらや、思いには、他に思っていることがあるかもしれないと気づきました。そして、自分がたくさん同じ物がある中で、そのたった一つをとっても愛するだけで、その一つはとっても大切で特別な存在になる人だと知りました。私は今「石を選べ！」と言われてたら適当にもってくるけれど、昔は、「絶対にこれがいい！」というのがありました。そのように、一つの物を愛するだけで特別と思えるんだと、改めて気づかされました。そんな、素晴らしいことを教えてくれた王子様が私は大好きです。」

この文章は愛する友人が述べてくれたものです。その友人は、今回のことばのクラスに参加してくれていました。とても素直で、愛らしい感想に感謝します。

この感想を読んでお気づきの方もいらっしゃるでしょう。今回のことばのクラスでは、サン＝テクジュベリ「ちいさな王子（星の王子さま）」を朗読しました。原題は「Le Petit Prince」で「小さな王子」という意味です。元々はフランスの作家アントワヌ・ド・サン＝テクジュベリが第二次世界大戦中に亡命先のアメリカで発表した文章です。現在は世界各国の言語に翻訳され世界中で愛されている名著となっています。



今回このクラスを開催する中で、まさに作品中で重視されていた「目に見えない関係」を二人の大切な友人と築いていく機会となりました。初めてのクラスでは、一人の友人に目隠しをしてもらい、もう一人の友人に彼女をエスコートしてもらいながら山の学校内にある急な石段を登りました。私は、当初はこの体験を通じてリーダーシップを学んでもらおうなどといった目的ありき的手段としての経験を勝手に想定しておりましたが、私の浅はかな期待とは裏腹に、二人の友人はもうすでに見えない関係を築き、石段を目隠しで登る中で生まれるスリルさえも楽しんでいたので、この瞬間私がやることといえば、ただ後ろで転んでもいいように見守ったこと、そうそれがこのクラスにおける私のスタンスとなりました。

二人の友人とはたくさんの思い出があります。王子様が物語の中で、相手が感じていること、思っていることにすぐに気づいてしまうので度々驚かされながら、旅を共に進めました。そして、友人の一人のそのまた友人が親御さんを亡くされたということを知り、その時には死について向き合う会を開きました。「死ぬってどういうことなのだろう？」世界各国で死後の世界について色々な解釈がなされていることについても語り合いました。数々のことばと思いを残し亡くなった日野原重明先生の書籍からも学び「いのち」について、語りあいました。そして王子さまから学ぶこともありました。たとえ姿が見えなくなったとしても、その間で築かれた目に見えない関係はずっとその人の心に留まり、私たちが経験している世界さえも変えてしまうことであるのだということ語り合いました。

資本主義社会の中で人材も商品も代替可能で大量生産されており、私たちは虚構のシステムの中で目まぐるしく歯車のごとく働き、生きており、気づいたら私たちの心は乾き、乾いていることすら気づかない状況になっているのではないのでしょうか？

星の王子さまを読む中で、大人も子どももゆっくり立ち止まって、目に見えない大切なものに気づいていくこと、そしてかけがえのない代替のきかない存在が今ここにあるのだということに感謝して感激して共に生きていけたらどんなに幸いなことだろうかと思わされるのです。私の大切な二人の友人、王子様、サン＝テクジュベリさん、このようなことを気づかしてくれたこと本当にありがとう！



最後に・・・「王子は目をつぶったまま水を飲んだ。なにかのお祝いみたいに、嬉しさがこみあげてきた。その水はただの飲み物などではなかった・・・心にもおいしい贈りものなんだ。」ここでは水が喉の渇きだけではなく、心の乾きまで潤したことがわかります。この文章を読むとわたしはあることばを思い出します。「しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。(新約聖書ヨハネ福音書 4:14)」と。今このコロナの被害が拡大し、病院で救護に回っている方々、孤独を感じている人、心に渇きのある方々全ての方々の心の内が溢れるばかりの愛で満たされるようお祈り申し上げます。

2020年8月から『冒険者たち ガンバと15ひきの仲間』（斎藤淳夫、岩波文庫）を読んでいます。この稿を書いているときには、32章あるうちの30章まで読みました。ネズミとイタチの戦いを描いた叙事詩です。残すは2章。いよいよ読了間近です。

読んだ後は各章ごとに要約をしています。あるとき、受講生のR君が、自分から「要約をしたいので、作文用紙をください」と言ったことがありました。私がそれを言う前に用紙を欲したのです。キケローの書いたものに、プラトンからの引用で「自分で自分を動かすものは永遠」（『国家』6.28）という言葉があります。それを思い出しました。



つぎのテキストを紹介します。『タイム・マシン 他九篇』（ウェルズ、橋本横矩訳、岩波文庫）です。『水晶の卵』、『ザ・スター』、『新加速器』などが収められています。残り数回ですが、クラスでひもとくことを楽しみにしています。



R君はクラスの待ち時間、いつも『北欧神話物語』（K・クロスリイ・ホランド、山室静ら訳、青土社）を山の学校のカウンターから借りて読んでいました。授業がはじまると本を挟み、本を戻します。その姿を毎週のように見かけました。ついに読破したあかつきには、その本をクリスマス・プレゼントとしてもらったそうです。そういうわけで、北欧の神々のことをたずねると、打てば響くように話してくれました。

北欧神話は、ラグナロクとよばれる終わりの確定している運命観を持ちますが、そこに尽きせぬ魅力を感じるそうです。そしてその世界観を一つの基調として、小説も書いているとのこと。何度かホワイトボードでそのアイデアを説明してくれました。秘密にすべき新規性があるので、詳細をお伝えできないのが残念ですが、とにかくすごいです。一本の骨太な物語にいくつもの他の物語がからまり、まるで世界樹のような壮大な物語群をなしていました。神話、SF、ファンタジー、さまざまな本から影響を受け、咀嚼し、自分の未来の物語として出力していることがわかりました。ぜひ作品に「終わりを与える」ことを応援しています。

『西洋の児童文学を読む』A（小学5～6年）

担当 福西 亮馬



昨年度、『はてしない物語』（エンデ、上田真而子訳、岩波書店）を読了しました。受講生のみなさん、おめでとうございます。

つぎは『小公女』（バーネット、高樓方子訳、福音館書店）を読んでいます。四分の三にあたる第14章まで進みました。セーラは、大金持ちの子から突然みなし子となり、寄宿学園の下働きをさせられます。彼女の心を支えたのは「想像力」でした。セーラは次のように言います。

「いちばん寒かったときも……いちばんおなかがすいていたときも……ほかのものにはならないようにしようって……努めていたんです」（18章）



と。「ほか」とは「王女以外」のことです。セーラは、想像力に欠ける人々のどんな仕打ちに対しても「王女になったつもり」で忍び、心までは貧しくならなかったのです。題名が『小公女』（A Little Princess）であるゆえんです。第17章「この子がその子だ！」で、セーラはインドの紳士に保護されます。その劇的な場面をクラスで読むことが何より楽しみです。3月に読了の予定です。

つぎのテキストを紹介します。『クローディアの秘密』（カニグスバーグ、松永ふみ子訳、岩波少年文庫）です。十二歳のクローディアは是が非でも秘密を持ちたくて、家出——ただし快適な——を決意します。そこで家出先に

選んだのが夜のメトロポリタン美術館でした。それだけでも面白い展開ですが、彼女は美術館の天使像について、真贋の秘密に触れます。

「秘密が内側から人を支える」という作品のメッセージは、十代の読者にきっと響くだろうと思います。またクローディアが出会った老婆の言葉で、幸福とは「わきたつ感情が心の中に落ちつき場所を見つけること」だとあります。一体どういうことなのかを深く考えさせられる作品です。お楽しみに。

(来年度、中学に上がる受講生については、『西洋の児童文学を読む C』を設け、続きを読みます。ぜひご参加ください)

『かず』1~2年

担当 谷田 利文



このクラスでは、算数のドリルと、発想力を育てるパズル問題を解いてもらっています。進めていく中で、集中力や意欲が高まってきたと感じたので、現在は複数のドリルを並行しながら、どんどんと問題を解いていってもらい、間違った所を解説する形をとっています。

かけ算や、角度の概念を初めて学ぶ姿を見るのは、私にとっても新鮮な体験でした。自分が学んだ時は、一周の角度が360度だということを、そういうものだと思っただけですが、いざ自分が教えるとなると、なぜ360度なんだろうと疑問がわき、改めて調べてみました。学ぶ中でこのような疑問をもつことの重要性も伝えていければと思っています。一年間一緒に学んだことが、今後の基礎になればと願っています。

『かず』3~4年

担当 中村 安里



かずのクラスでは、論理的思考あるいは柔軟な発想力の基礎を構築していく時間となりました。例えば、「大人に役立つ！頭のいい小学生が解いているパズル」では、はしご型思考、ピラミッド型思考、しらみつぶし思考、リバース思考、単純変換型思考などあり、はしご型思考は「知識と経験で直感的に解いていく思考方法」、ピラミッド型思考で

は「わかったことを積み上げながら解いていく思考方法」、しらみつぶし思考では「ルールを作って、もれなく一つずつ確認しながら解いていく思考方法」、リバース思考では、「答えを予測し、逆算して解いていく思考方法」など問題を通じてたくさんの思考方法に触れていきます。これらの思考は問題の中でとどまることはなく、日常で何かを観察するとき、体験するとき、あるいは人とコミュニケーションを取るときに、用いていることです。たとえば日常的に話していて、会話が複雑で要点が見えない人と出会ったときに、仮に相手の話を、段階を追って整理することができたら、相手の話の中にある重要な答えを予測して、会話を進めることができたなら、あるいは複雑そうに見える話が実はとても単純な話なのかもしれません。このように私たちが算数に向き合うこと、あるいは論理的思考のトレーニングをしていくことは、生きていく上で役立つ思考の道具を自分の心の中で磨いていくプロセスなのです。この他にもスキャン思考、クワイエット思考、ステップ思考、水平思考など色々な道具があります。毎回のクラスで身につけていきます。先が見えない社会の中で、一人一人がこれから出会っていく課題に直面したときに、多様な思考方法によって課題解決を導き、そのプロセスを楽しめる人になってほしいという願いのもと講座を開いています。



また、机上の勉強だけではなく、ときに身体を使ってゲームをしています。下記の写真は迷路を紙で作って、身体を使って課題解決に取り組んだときの写真です。誰かと協力することであるいは共に切磋琢磨し合うことによって今までできなかったことができたときの喜びは一人で成し得たとき以上のものがあるのではないのでしょうか？

参加してくれた方一人一人の中に宝物、賜物は眠っています。その人にしかできないこと、その人にしかない素

質があります。たとえば今かずのクラスに参加していただいている方はとても絵が上手なので、その人にしか描けないこと、体験できないことが詰まった冒険日記を作っていきます。楽しみですね。日常の遊びの中であるいは冒険の中で、上記で挙げた柔軟な思考の道具を心に秘めて、様々なことを経験し、学んでいってほしいと願っております。

『かず』 5～6年 A

担当 福西 亮馬



このクラスでは、パズルの時間と、算数の本を読む時間を設けています。中学生になると、内容の比重が計算から論理に移ります。それを意識して取り組みました。

本は教養的、啓蒙的な内容です。今年度は、『図形』(下)(小和田正、さえら書房)を読了しました。3角形の合同の証明や、相似、3平方の定理について学びました。

つぎに、『形と曲面のひみつ』(瀬山士郎、さえら書房)を読みました。内容はこれまでの平面幾何とはうってかわって、トポロジーという新しい幾何学です。トポロジーは、端的に言えば、「距離」をまだ導入していない世界、集合の要素が「つながっている」か「つながっていない」か、その原初的な関係性だけを見る世界です。「近い/遠い」という概念がないのです。そうすると、曲面をねんどのようにぐにやりと曲げても、もとの形と同一視されます。そのような幾何学では、ふつうの計算ではなく、面を切ったりつないだり、のぼしたりすることが手立となり。そして、変形に左右されない性質(不変量)とは何かを、テキストを通じて考えました。すると、球の表面、ドーナツの表面(トーラス)、2つ穴のドーナツの表面など、曲面はその「穴の数」(これが不変量です)によって分類されることを知りました。

また、「クラインの壺」とよばれるものを3次元的に作って、切るとどうなるかを実験しました。すると2つの「メビウスの帯」とよばれるものになりました。逆に言えば、2つのメビウスの帯を貼り合わせたものが、クラインの壺なのです。「ぜんぜん形がちがうのに、意外」と、受講生も驚いていました。

『図形』で平面幾何の内容を俯瞰したことが中学の学習の助けとなることを、また『形と曲面のひみつ』で読んだことが好奇心の支えとなることを願っています。



(左:クラインの壺。右:メビウスの帯。wikipediaより)

『かず』 5～6年 B

担当 浅野 望

今期は5年生1名、6年生1名の計2名とともにやっています。授業内容は引き続き、解けそうで解けない問題2,3間にじっくり取り組むというものです。具体例として、最近取り組んだ問題の中で特に興味深かったものを以下に挙げておきます。



赤い帽子が3つ、白い帽子が2つあります。これをAさん、Bさん、Cさんに見せたあと、アルファベット順に前を向いて並ばせ、本人には見えないように帽子をかぶらせました。それぞれ自分より前にいる人の帽子の色はわかりますが、自分と自分の後ろにいる人の帽子の色はわかりません。まず、Cさんに「あなたは何色の帽子をかぶっていますか」と聞くと、「わかりません」と答えました。次に、Bさんに同じことを聞くと、「わかりません」と答えました。そしてAさんに同じことを聞くと、「わかりました!」と答えました。Aさんの帽子の色は何色でしょうか。ただし、これを実施している部屋には鏡などの小細工はなく、他の人のセリフは聞こえるものとします。

上の問題はなかなか難しいと思います。実際、授業でも途中までひとりで取り組んでもらったのですが苦戦していました。しかし、生徒さんどうして話し合ってみてもらうと(私が軽いヒントを与えることもしばしばありますが)、意外といいところまでたどり着いてくれます(例えば上の問題だと、Aさん、Bさんは2人ともは白い帽子ではないことに気づいてくれました)。この授業を通して、人と話し合ってみて問題に取り組むことおよび算数のたのしさ・おもしろさに気づいてもらえれば幸いです。

『西洋の児童文学を読む』B（中学生）

担当 福西 亮馬

昨年度、『はてしない物語』（エンデ、上田真而子訳、岩波書店）を読了しました。受講生のみなさん、おめでとうございます。

その後、『モモ』（エンデ、大島かおり訳、岩波書店）を読んでいます。現在、第二部「灰色の男たち」に入りました。



「あなたはすでに人生の最高の年齢に達しているように見受けられます。（…）そこであなたの生涯を呼び戻して総決算をしてみませんか。勘定してください、あなたの生涯のどれだけの時間を債権者が持ち去ったか、またどれだけを愛人が、どれだけを主君が、どれだけを子分が。またどれだけを夫婦喧嘩で、どれだけを奴隷の処罰で、どれだけを公用で都じゅうを走り廻って。これらに病氣も加えて下さい、私たちが自らの手で招いた病氣を。また使わぬままに投げ出した時間をも加えて下さい。するとお気づきになるでしょうが、あなたが持つ年月は、あなたが数える年月よりも、もっと少ないでしょう。」

これは、セネカ『人生の短さについて』の一節です（3章2節、茂手木元蔵訳、岩波文庫）。「これまで時間を浪費してきた、あなた、今すぐ節約なさい」と。『モモ』の第6章で、床屋のフージー氏が灰色の男にまるめこまれる調子とよく似ていることに気がきます。異なるのは、その後の展開です。セネカは「暇」を、灰色の男たちは「多忙」をすすめます。その点で『モモ』は古典のパロディになっています。



人生がむなしと思えるようなとき、灰色の男たちはささやきます。豊かな人生の「ため」の、時間の「貯蓄」を。しかし案の定、彼らに預けた時間は全部盗まれてしまいます。

第三部「時間の花」では、灰色の男たちは、「時間の国」への道を知ったモモをつかまえようとしてます。「時間の国」にアクセスできるようになれば、もう時間をけちけち盗む必要がなくなるからです。けれども結局その欲望が自滅を招きます。

モモの勇気によって、物語から灰色の男たちはいなくなります。けれども、「過去に起こったことのように話しましたね。でもそれを将来起こることとしてお話してもよかったんですよ」と、作者は予言します。深く考えさせられます。クラスで『モモ』をはじめて読む人にも、何度も読み返す人にも、新しい『モモ』が見つかることを願っています。

トムは真夜中の庭で



つぎのテキストを紹介します。『トムは真夜中の庭で』（ピアス、高杉一郎訳、岩波少年文庫）です。トムは、弟のはしかのせいでおじさんの家に隔離されます。遊び相手がいなくて退屈で仕方がありません。真夜中、古時計の十三回目の音を耳にします。起き出し、勝手口を開けると、見慣れない古風な中庭を目にします。そこでハティという少女と出会います。

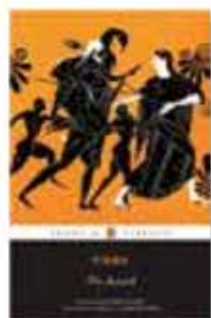
トムはハティの様子を何度も見にゆき、最後には「二人で会う時間を永遠にしよう」と決意します。「もう時がない」という黙示録の天使のフレーズに思わず切なくなる、「時間」をテーマにした児童文学の名作です。お楽しみに。

『西洋古典を読む』（中高生）

担当 福西 亮馬

このクラスでは、ウェルギリウス『アエネーイス』（岡道男・高橋宏幸訳、西洋古典叢書）を読んでいます。現在、第6巻です。

アエネーイスは、巫女のシビュッラを道案内に、冥府へ下ります。目的は父アンキーセスの霊に会うためです。第6巻の真ん中近く、嘆きの川の渡し守カローンが生まれと言います。この稿を書いている時点で、そこまで読みました。このあとは、ディードーの霊が出てきます。ディードーは、アエネーイスを助けたカルターゴの女王です。彼女はアエネーイスと恋に落ちたあと、彼がイタリアに向けて出発したことを嘆いて自殺したのです。そのディードーの霊に対して、アエネーイスは「神々の命令だったのだ」と言います。また第6巻の最後には「ローマ人のカタログ」と呼ばれる箇所があります。アエネーイスが、自分のあとの時代に生まれるローマ人の魂の列を目にし、父の説明を受けながら励まされるシーンです。しかしその未来の列には、夭折を運命づけられた若者も並んでいます。第6巻は過去と未来が交錯する巻です。お楽しみに。



さて、第6巻の途中から、英文訳を日本語に訳すことに挑戦しています。『The Aeneid』（Robert Fagles 訳、Penguin Classics、ペーパーバック 2010）を使っています。ペースは20行ほどです。はじめのうちは、ほとんどの単語に辞書を引かないといけなないので、何時間もかかり大変だろうと思います。一方、受講生のA君は、辞書を引くことを「旅」だと言います。そのようにmustではなくて、好奇心の対象とできる余裕に、以前A君と一緒に読んだ、セネカ『人生の短さについて』の暇（otium）を思い出します。

テキストを読んだあとの時間は、A君が、以前に読んだ本のことをレクチャーしてくれます。この間は、『中世チェコ国家の誕生』（藤井真生、昭和堂）でした。「一口に封建時代といっても、黎明期のそれはイメージとだいぶ異なっていて興味深いです。本当の歴史は均質ではなく、流れているのです。それを時代の名称で区分することは、あたかも川をいったんせき止めて、水質調査するようなことなのです」というA君。そのようなA君の熱意を受けながら、私も学ぶことを励まされています。

『東洋古典を読む』（中高生）

担当 陳 佑真

現在、「東洋古典を読む」では、中学生の方一名と一緒に『三国演義』を読んでおります。

『三国演義』は中国・明の時代の羅貫中という謎の多い人物がまとめ上げたと言われ、そのスリルあふれる描写で、王侯貴族から庶民まで、多くの人々を熱狂させてきました。日本でも昔から色々なエディションで読み継がれてきた物語ですが、このクラスでは、小川環樹氏・金田純一郎氏の格調高い訳文を楽しむことのできる岩波文庫版を使っております。

この書物は滅亡間近の漢王朝を再び立て直そうとする劉備、新しい王朝を作ろうとする曹操・孫権といった英雄たちの戦いを描いた名作ですが、実はその中には、中国の古典的な思想を基礎とした表現が多数現れます。

その一つが、万物は木・火・土・金・水の五つのエレメントから構成されている、とする中国の伝統的な五行思想です。たとえば、本書冒頭には、「漢朝は、高祖が白蛇を切りすてて旗を揚げたのに始まり、ついに天下を一統した」（6頁）という描写があるのですが、これは、火は金属を溶かすから金に打ち勝つ、という考えをベースにしています。火属性の高祖劉邦が、金属性の秦王朝を倒して新しい王朝を作る、ということを神話化した表現なのです（白は金属性を象徴する色）。

また、黄巾の乱の参加者が黄色のバンダナを巻いているのも、火が燃え尽きれば灰（土）が残る、という考えから、火属性の漢王朝が燃え尽きた後は自分たちの時代なんだ、という意味が込められています（黄は土属性を象徴する色）。



こういった、知った上で読むと『三国演義』がもっと面白くなるお話の紹介も交え、受講される方の好奇心を膨らませることを目指して授業をしております。

難しい言葉の読み方や意味の取り方も学びつつ、この時なぜこの人物はこんなことをしたのか、毎回楽しくわいわい話しています。

魅力あふれる『三国演義』の世界、一緒にのぞいてみませんか。



●『東洋古典を読む』クラス紹介 齋藤賢

本講座では、前任の方を引き継ぎ、『三国演義』を受講生のかたと一緒に読んでいきます。

『三国演義』は『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』と並んで中国四大小説の一つに数えられ、中国のみならず、日本をはじめアジア各国で長らく愛読され、正に「東洋古典」の名に相応しい書物と言えましょう。義を重んじ、衰滅しつつある漢室の再興を目指した劉備、冷徹な現実主義と鋭い戦略眼をもち、最強国魏を建てた曹操、その背後で虎視眈々と機を窺う孫権、そして彼らを支えた数多の武将や策士たち、彼らの生き方や信念は千差万別ですが、どれもみな読者を惹きつけてやみません。

授業では主に『三国演義』を読み進めていきますが、合間に正史『三国志』などを参照しながら、『演義』と史実ではどの部分が同じでどの部分が異なるのか、そしてその理由はどうしてなのか、を考えていくことができればよいと考えています。というのも、『三国演義』は史実としての三国時代を核としつつ、長い歴史を経て明代に成立した小説であり、史実と『演義』の差異からは、中国の読者である知識人の思惟や民衆の期待・希望などが読み取れるのではないかと思うからです。東洋古典たる『三国演義』から能動的になにかを汲み取ろうとすることで得られる成果は決して小さなものではないでしょう。

テキストは岩波文庫版の小川環樹・金田純一郎訳『三国演義』を用いますので、正確な訳が期待できるとともに、日本語としても洗練された文章を味わうことができるでしょう。テキストのどの箇所を読むかについては、受講生の方のご関心に沿って決定します。冒頭から読みはじめるのもよし、名場面を重点的に読むのもよし、と考えております。

なお、本講座ではZoomを利用して実施いたしますので、速くにお住いのかたでもご参加いただけるようになっております。

『歴史／れきし』（中学生／小学生） 担当 吉川弘晃

山の学校では、中学生向けに「歴史」を、小学生向けに「れきし」を開講しています。このエッセイでは毎度、各クラスの近況を報告するのが慣わしになっているのですが、その前に昨年初めに発生し、瞬く間に全世界に蔓延し、現在もなお猛威を振るうコロナウイルス（COVID-19）について言及しておかねばなりません。

何よりもまず、ひとつの疫病がこれだけの規模と速度で地球遍く死をもたらしているという、この事態にしっかりと驚くことが大事です。歴史の様々な知識を身に付けると、現在生じていることを過去と比較して位置づけて考えられるようになる反面、「人間の行為など所詮はそんなものだ」「数千年単位で見れば珍しくもなんともない」といった、現在への冷めた（ニヒリズム的）態度につながってしまうことが多いからです。

もっと注意しなくてはならないのは、過去の悲惨な事例と現在の類似性を強調しすぎるあまり、不確かな根拠に基づいたパニックを広めてしまうことでしょう。例えば、コロナウイルスによって約1世紀前の「スペイン風邪（インフルエンザ）」への注目が集まっています。第一次世界大戦末期（1918年）に発生し、世界中（日本を含む）で数億人の感染者と数千万人の犠牲者を出した疫病です。現実の思わぬ事件によって忘れられた過去に光が当たることそれ自体は歴史という営みの醍醐味でしょう。しかしここで立ち止まって考えるべきは、歴史的世界では全く同一の出来事は生じ得ないということです。例えば、100年前と今とでは医療技術も衛生環境も全く違います。そして何よりユーラシア大陸が丸ごと戦争と革命でてんやわんやの時代に、どこまで精確な統計を出せたのでしょうか。

とはいえ、マーク・トウェインも言うように「歴史は反復しないだろうが韻を踏む（History may not repeat itself but it does rhyme）」のも確かです。国家権力は国民の命を守るために個人の自由をどこまで制限できるのか？ 緊急事態下で社会の機能が停止していくなか限られた人材・物資・財源をどう配分するのか？ 特定の個人や集団・職業への差別はなぜ生まれてしまうのか？ 人はなぜそれでも集まって生きようとするのか？ この他にも、一生をかけても解けないくらい途方もないけれども人間にとって極めて本質的な問いが、この1年間の身近な生活から生まれてくるのではないのでしょうか。

話が壮大になりましたが、このクラスではオンライン授業への切り替えの他は、やることはあまり変えていません。教科書を声に出して読み、正しく理解し、自分の言葉でそれを説明すること。可能であれば、著者へのコメントや批判、

自分なりの疑問点を見つけ、やはりそれを言葉にすることです。

「歴史」クラスでは高橋昌明『武士の日本史』を、「れきし」クラスでは松澤裕作『生きづらい明治社会』をそれぞれ教科書として指定しています。前者では、私たちが時代劇や漫画、アニメなどで想像する「サムライ」が歴史上の「武士」とどのように違っているのか、その違いはなぜ生まれたのかという問いをもとに、古代から近現代までの日本史のなかで「武士」とそのイメージの変遷を考えていきます。後者では、2年前に150周年を迎えた明治維新（1868年）が多くの場合、近代日本の出発点として肯定的に捉えられることに対し、そんな明治の時代（～1912年）を、貧困や混乱に苦しんだ農村や都市の老若男女の姿から再考していきます。

いずれの本も、歴史上の概念や時代区分について、従来の論に対して大きな批判とともにスケールの大きな話を投げかけています。必ずしも著者の姿勢に共感・賛同する必要はありません。小中学生にとって読むのが簡単な本とは決して言えませんが、それでも自分の精神と言葉を頼りに足掻いてみてください。講師はそのための手助けをいたします。



『中学英語』

担当 浅野望

今期は中学2年生2名の授業です。前半にニュースや物語などの長文（よく読んでいるのは News in Levels というウェブサイトの Level2 の文章）を読み、後半に文中に出てきた内容の補足説明や、既習文法の問題に取り組んでもらっています（用いているテキストは『最高水準問題集』）。参加してくれている2名は文法の基礎もしっかりしていますし、長文読解も速く正確にできるので、教材を用意するのが毎回大変なほどです。

授業では特に体系立てて文法を教えるというかたちは取っていないのですが、しばしば文法事項に関する質問を受けるので、私も辞書を引いて例文を引っ張ってきたり、文法書を参照したりするなどしてできるだけ正確に丁寧に説明するように心がけています。これのおかげで、私も英語の論文や未翻訳の教科書でよくわからない文章に出会ったら、まずはいろいろと調べてみる習慣の大切さを再認識しました。中学生のうちから文法の基礎を固めたり、語彙を増やしたりすることは、直近の定期テストでいい点数が取れるという短期的な効用をもたらすだけでなく、将来自分の興味ある専門的なことを学ぶ際に非常に役に立ちます。週1回80分という短い時間ですが、そのような習慣を身につける機会になればと思います。

『中学数学』

担当 浅野望

今期は中学2年生2名が参加してくれています。この授業の基本的な形式は自習です。学校の授業で取り組んでいる範囲の発展問題に取り組んだり、苦手を感じている分野の復習をしたりしています。私の役割は生徒さんから話をうかがって教材を用意し、わからない問題の解説や補足説明をすることです。私が中学生だったころは与えられた問題をただ解いていたのに対して、今の生徒さんは「方程式の文章題（距離と速さ）が不安だから問題がほしい」や「三角形の合同の証明の発展問題に取り組みたい」など今の自分に必要なことを認識し、それを何らかの形で補おうとするのでとても感心しています。結局、学校でおこなう勉強というのは、その内容をマスターするためというより、新しいことを学ぶ姿勢を得るためのものだと私は思います。また、それを早いうちから身につけておくと、何か新しい変化が起こったり、学ぶべきことが出てきたりしても、それらに柔軟に対応し、多くのことを吸収できるはずです。



さて、最近授業で話として出てきていますが、来年度はいよいよ高校受験があります。とはいえ、ここまでの様子を見る限り、（不安な気持ちは十分にわかりますが）新しいことを始めようと前のめりになるというよりはむしろ、ときには周りに頼りつつこの調子で落ち着いて取り組めばいいのではないのでしょうか。もちろん、私も機会があればできる限りサポートさせていただきたいと思っています。

『『数学ガールの秘密ノート』を読む』

担当 福西 亮馬



2019年10月から『数学ガールの秘密ノート』（結城浩、SB Creative）を読んできました。現在出版されているもののうち、中学生が内容を容易に追えるものとして、『整数で遊ぼう』『式とグラフ』『場合の数』『微分を追いかけて』『学ぶための対話』の5冊を選びました。受講生に音読してもらい、そのつど解説をはさみながら、読了しました。

『式とグラフ』では、計算の世界（方程式）と幾何の世界（グラフ）の往來が強調されていました。計算は正確な結論に至るために必要不可欠です。一方、計算結果にどうしても納得がいかないときは、どのようにアプローチしたらいいのでしょうか。そこで幾何の出番です。

たとえば「2次方程式 $x^2-1=0$ の解を求めよ」という問題を考えます。 $x^2-1=0$ の「=」はいつでも成り立つわけではなく、「そのようなときがある」という意味です。そしてそのときの x の値を求めよ、というのです。答は計算で $x=1$ と $x=-1$ と出せます。 x^2-1 に $x=1$ や $x=-1$ を入れると 0 となるので、これが解です。けれども、「ちょっと待てよ」と立ち止まります。答をいったんグラフで見直そう、と。すると、どうでしょうか。

まず、 $x^2-1=0$ を、 $y=x^2-1$ と $y=0$ の「組み合わせ」だと解釈します。（ y で両式をつなぐと、 $x^2-1=0$ になります）。 $y=0$ は、またの名を「 x 軸」といいます。そして、グラフで見直すと、 $y=x^2-1$ と $y=0$ は、2点 $(x,y)=(-1,0)$ と $(1,0)$ で交わります。

つまり、 $x^2-1=0$ の解を計算することとは、「 $y=x^2-1$ と $y=0$ (x 軸) との交点 (の x 座標) を求めること」だったのです。これが計算に付随する「かたち (意味)」です。

『微分を追いかけて』では、微分について学びました。微分とは何でしょうか？ これも幾何学的には、グラフの接線のことです。いまはその理解で十分です。学校で本格的に学ぶときの足がかりにしてください。

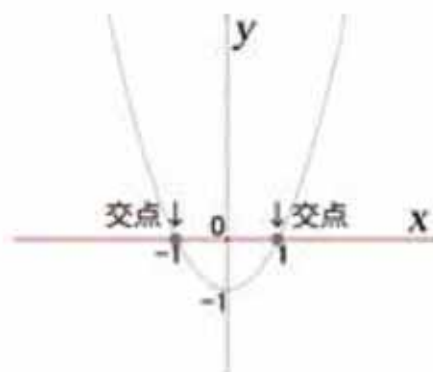


図 $y=x^2-1$ と $y=0$ の交点

『高校数学 C』

担当 入角 晃太郎

この講座では、教科書傍用問題集、『基礎問題精講』、『青チャート』などの、高校1・2年生向けの基礎的な問題集を解いてきました。その際、ちょっとした公式などもいざとなったら自分で導けるようにと、問題を解説するときは、使った公式がなぜ成り立つかを簡単に示すように心がけました。これは、ひとつには「公式を忘れても大丈夫にしておくため」ですが、そのためだけではありません。

数学を習うということは、歴史などの学科を習うこととは違う営みであると思っています。歴史の教科書は、そのテキスト自身だけをいくら眺めていても、それが事実なのかどうかはわかりません。実際、歴史書のような書きぶりの、さも「もっともらしい」フィクションは実在します（酒見賢一『後宮小説』など）。あるテキストがフィクションではなく歴史書であることを知るには、テキストの外に出て、そのテキストが置かれている文脈を参照する必要があります。つまり、歴史を習うということは、そうした文脈に自分を接続することであると言えると思います。

一方で、数学の教科書はどうでしょうか。この授業では『基礎問題精講』というテキストを用いましたが、この本が何らかの正しさを持っていると納得するためには、この本の置かれている文脈を確認する必要があるのでしょうか。恐らくそうではないでしょう。数学の本は、仮にその本と無人島で出会ったとしても、何らかの真理を教えてくれると思います。数学の正しさは情報源の信頼性によってもたらされるものではありません。

だから、数学の定理は、歴史上の出来事を知るようには学んではだめなのです。ある定理を知ったら、それを自分でも証明することが大切です。自分で証明できたということは、その定理は「いま、ここで」その正しさが確かめられたこととなります。タイムマシンがない以上、歴史上の事件は直接見に行くことはできませんが、数学の正しさはいまここで見るすることができます。自分の手で確かめることをしない勉強法は、数学の数学らしさを損ねています。数学を学ぶ上で「自分で導いてみること」は、数学の性格上、欠かせないプロセスなのです。教科書に出てくるすべての定理に厳密な証明を与えることはできないにしても、なるべく自分で納得しながら勉強を進められるような授業をしてゆきたいと思います。



『ギリシャ語初級』

『ギリシャ語中級』 A・B

『ギリシャ語上級』 A・B

『ラテン語中級』 A・B

『ラテン語上級』

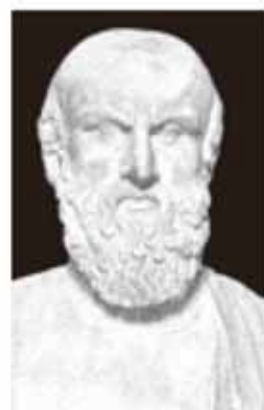
担当 広川直幸

「子の曰わく、学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや。」言わずと知れた『論語』学而第一の冒頭である。朱熹の集註によれば、「学」の意味は「効（まねる）」であり、「習う」とは「鳥が数多く飛ぶように止むことなく復習する」ということである。まねることにより学んだことを機会がある度に何度も何度も復習するとそれが身につく心の中にじわりと喜びが湧いてくるという意味を表している。これは、古典ギリシャ語やラテン語の学習にも当てはまる。

『論語』は続ける、「朋あり、遠方より来る、亦た楽しからずや。」「朋」は朱熹によると単に仲のよい友達ではなく「同類」を意味する。前文の意味を加味すれば、「同じように学問に志し、心の中に学問の喜びを持つ者」のことである。この文は、同じ学問に志し、学問の喜びを知る者は、近場からは言うに及ばず、労を厭わず遠方からすら集まる。そうすると語らいの内に「楽しさ」が生じるということの意味している。これは授業についてもそのまま当てはまる。（ちなみに、程子の解釈によると「説」が心の中にあるのに対して、「楽」は発散して外にあるものである。そうであるなら、「説」はラテン語の *gaudium* に、「楽」は *laetitia* に相当する。）

今年度は新型コロナウイルスの影響で、遠方からはおろか近くからすら人が集まれないという状態で始まった。「楽しさ」を奪われた状態である。緊急事態宣言が解除されて、6月から山の学校の授業が再開されても、遠方に住んでいるなどの理由で山の学校に来ることができなくなった受講生がいる。可能な限り遠隔授業で対応することにしたので、幸いなこと私が担当する授業に閉講したものはなかったが、休会を余儀なくされた受講生が数人いるのも事実である。また、Zoomを用いた遠隔授業は、便利ではあるものの、個人的にはいまだに違和感を感じる。パソコンの画面と音声は、発散された「楽」を伝えきれないのだろう。次善の策ではあるが、代用とはなりえないと感じる。

そのような状態で行われた今年度の授業の中で、まず特筆に値するのは、ギリシャ語上級Aが幕を閉じたことである。この授業では、初めにソポクレスの『オイディプス王』を読んでから、アイスキュロスの『テーバイ攻めの七将』『縛られたプロメテウス』『ペルシャ人』『救いを求める女たち』、要するにオレスティア三部作を除く全ての現存作品を読んだ。「読んだ」というのはこの授業の場合、徹底的に本文批判上の問題点を検討しながら精読したということである。このような機会は得がたいものであり、受講生には長年の受講を感謝している。



次に、ラテン語中級 A とラテン語上級で読んでいるブラウトゥスがどちらももうじき読み終わるということが挙げられる。中級 A の『捕虜』は今学期末ごろに、上級の『アンピトゥルオー』は来学期初め頃に終わりそうである。私はどちらかというラテン語は苦手なのだが、ブラウトゥスを読むことを通じて、ラテン語の生きのよさに触れることができ、親しみが増した。中級 A では次もブラウトゥスを読むことに決まった。『プセウドルス』を読む。古喜劇に対して新喜劇に分類されるブラウトゥスは、笑いも涙もあり、吉本新喜劇に通じるところがある。興味がある方はこの機会をお見逃しなく。

その他の授業については、学期が終わるごとにホームページの情報を更新しているので、そちらを参照していただきたい。

さて、古典ギリシャ語・ラテン語の学習に大切なのは、冒頭に述べた『論語』学而第一の「学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや。」に尽きる。教わった語彙や変化表や文章をまねして、根気よく何度も復習し、スラスラと想起、暗唱、理解ができるところまで持って行き、それらの知識を用いて新たな文章を読み、作文をする。そしてこの作業を弛まず繰り返すことが喜びとなるのである。これは「楽しさ」に通じる道ではあるが、決して「楽な」道ではない。そこで、本居宣長が初学者のためのアドバイスとして記した『うひ山ふみ』から、学習者を励ます一説を少々長くなるが引用して終わりとする。

「詮ずるところ學問は、たゞ年月長く倦まずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、学びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみかゝはるまじきこと也。いかほど学びかたかたよくても怠りてつとめざれば、功はなし。又人々の才と不才とによりて、其功いたく異なれども、才不才は、生れつきたることなれば、力に及びがたし、されど大抵は、不才なる人といへども、おこたらずつとめだにすれば、それだけの功は有物也。また晩學の人も、つとめはげめば、思ひの外功をなすことあり。又暇のなき人も、思ひの外、いとま多き人よりも、功をなすもの也。されば才のともしきや、學ぶ事の晩きや、暇のなきやによりて、思ひくづをれて、止ることなかれ。とてもかくても、つとめだにすれば、出来るものと心得べし。すべて思ひくづをるゝは、學問に大にきらふ事ぞかし。」

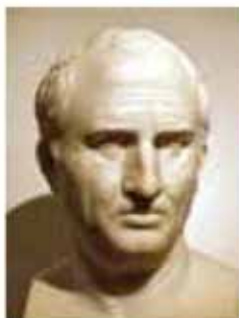
『ラテン語初級文法』『ラテン語初級講読』B・C

担当 山下大吾

初級文法クラスでは、教科書として岩波書店刊田中利光著『ラテン語初歩 改訂版』を用い、春学期にはそれを一学期で終える速習コースが開講されました。秋学期からは二学期で終える通常コースが開講され、途中受講生の変動がありましたが、現在オンライン式で参加されているお一方と共にゴールを目指して学習が続けられています。当日その課で学ぶ項目のみならず、以前学んだ範囲を可能な限り復習しながら取り組むように心掛けております。

講読 B クラスでは、引き続き Ca さんお一方と共にウェルギリウスの『農耕詩』を読み進めています。先日 3 歌まで読了し、最終巻である 4 歌に入りました。3 歌では牛や馬、羊などの家畜が主題となっており、その最終部では、1 歌最終部の政争の場面と対を成すかの如く、家畜に襲い掛かる不吉な疫病の描写が展開されています。Quaesitaeque nocent artes; cessere magistri.「対処法は、たとえ見つかったとしても有害である。名医も諦めてしまった」(3.549)という言葉は、この作品の中でのみ意味を成すものである様祈らずにいられません。

講読 C クラスの『老年について』では、全 85 節の 80 節まで進み、死を巡る考察の場面となりいよいよ読了が間近となってきました。受講生は学期ごとに入れ替わりがあり、現在はギリシャ語初級文法も受講されている F さんお一方となっております。



魂の不死を説くにあたってキケローは、プラトーンやクセノポーンなどギリシャ先人の思想を基に自説を述べており、註釈には彼らのギリシャ語原文が掲載されています。それらをキケローのテキストと対照すると、彼が先人の言葉のどこを活かし、どこを省き、どこで自らの見解を加えているのか判然とするのみならず、ギリシャ語では分詞構文となっている箇所がラテン語では動詞のある節で表現される傾向があるなど、両言語の性格の違いも分かり、大変興味深いものです。

『ギリシャ語初級文法』『ギリシャ語初級講読』A

担当 山下大吾

丁度去年の同時期に、岩波書店刊田中美知太郎・松平千秋著『ギリシア語入門 新装版』を教科書として開講し、通常参加とオンライン式の方々合わせて秋学期に5名という受講生を迎えた初級文法クラスは、先日無事所定の70課の課程を修了することが出来ました。ギリシャ語という、特に動詞に多様な活用を有し、統辞構造も極めて豊かな内容を持つ言語の学習を一通り達成された受講生の皆様の熱意に心からの拍手を贈りたく存じます。今学期の残りは、教科書の最後に取り上げられているプラトーンの『クリトーン』を読める所まで読むという講読形式の授業になっております。



講読クラスでは、Cuさんお一方と共にホメロスの叙事詩に取り組んでいます。昨年秋学期までに『イーリアス』の1歌を読み終え、現在は『オデュッセイア』1歌を講読中です。ヘクサメトロスの韻律に注意し、一語一語の文法形式を確認しながらの講読で、一回の授業で10数行から20行弱というペースで進んでおります。Cuさんはホメロスのみならずウェルギリウスにも関心を抱かれ、ある日『アエネーイス』の訳本で僅かに触れられている神話伝承の出自が何処に当たるのか不思議に思われ私に尋ねられました。調べた結果『イーリアス』の古註(スコリア)に遡るものであることが分かり、ギリシャ・ローマ古典世界の一体性に改めて目を開かれた様です。後日問題となった箇所スコリアのコピーをお渡しし、その探求心に敬服しつつ責を塞ぐこととなりました。

『ギリシャ語初級講読』B

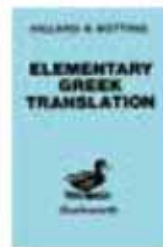
担当 竹下哲文

前任の堀川先生から引き継ぐ形で開始したギリシャ語初級講読Bでは、春学期からA.E. Hillard & C.G. Botting, *Elementary Greek Translation*, London: Duckworth, 1982 [orig. publ. London: Rivingtons, 1923] を教科書として平易な古典ギリシャ語散文を読んでいます。

現在の受講生は1名ですが、昨今の状況にかんがみ、専らZoomを用いた遠隔実施という形をとっています。設備が整ったこともあり、冬学期からは講師も自宅から接続する形式に変更しました。

教科書に用いている本は、古代ギリシャの歴史を題材にして、ペロポネネソス戦争でのアテーナイの敗北にいたるまでの様々な出来事を綴った文章が1ページごとに続いていく形式になっています。構成の都合上テキストの記述はときに省略的なため、そこで主題になっている事柄や歴史上の事件についての予備知識がある程度ないと話の流れや繋がりが見えにくい箇所もあります。そういう場面では必要な解説を加えるようにしており、そのぶん読み進むペースはやや緩やかですが、結果として古代ギリシャの歴史についても理解を深めることができているように思います。ちょうど本稿執筆時点で、アテーナイの僭主ヒッピアースの追放の箇所まで読み終えました。

また、章が進むにつれ文法的にも新しいトピックが出てくるため、それらをそのつど確認しながら読み進めています。既に学んだ内容でも、それらが実際のギリシャ語文の中で運用されている様子を見ることで、初級文法を終えて作られた骨組みに肉付けを行うことが狙いです。さらに、短いとはいえ複数の文が有機的に組み合わさった連続性のある言説を相手にする以上、接続詞やギリシャ語に特徴的な小辞 (particle) の用いられ方にも注意を向けるようにしています。関心のある方は是非一度お問い合わせください。



およそ三年半にわたり、山の学校でお仕事をさせていただきましたが、この度、東京の大学に着任するため退職することとなりました。お世話になりました受講者や教職員の皆様に篤くお礼申し上げます。

研究室で二級上だった前任の方より漢文入門を引き継ぐ際、陳君の好きにしてね、と一任され、最初は戸惑いました。というのは、徹夜をしてでもひたすら辞書を引き続けて原典を読みなさい、そこから思想史的な意義を読み取りなさい、というのが私が十年間受けてきた教育で、私の知る唯一の漢文学習方法だったからです。既に社会で様々な経験をされ、人生を更に豊かにするために新たに漢文を学んでみよう、という目的の方々にそういった研究者養成目的の授業を提供することは、当然趣旨に反しますし、設備上も無理があります。

どうすれば漢文の魅力を伝えることができるのか、悩みを抱えながら着任した私は、とにかく中国史や儒学の前提知識を要さないもの、大学にしかないような大型辞書や特殊データベースを使わなくても読むことのできるものを、ということを重視しつつ、まずは漢文の助字に関する自作の解説プリントを学習し、その後、句読点や返り点の入っていない中国の古い木版本のコピーをテキストにして漢文の作品を読んでゆくこととしました。

私が大学で初めて講読の授業に出た時、いきなり木版本のコピーを渡され、来週までにこれを読んでこい、と言われたのですが、当時の私は、木版本のコピーに朱を入れる、という行為にまるで自分が昔の文人になったような高揚感を覚え、たちまち漢文のとりこになりました。山の学校の教材にもすべて木版本のコピーを使用したことには、実は既に句読点が入った本で八十分も間をもたせる自信がなかったから、という消極的な理由もあったのですが、もしも私が漢文に出会った時の気持ちを少しでも共有できていたとすれば、これに勝る喜びはありません。また、どこに句読点を入れればどういう意味になるのか、ということの皆様が深く考えてくださったおかげで、読解の面でも良い結果につながったと思います。

果たして私の教材選択が適切なのか、私の教え方のせいで漢文が嫌いになったりはしないか、おそろおそろ始めた漢文入門でしたが、蓋を開けてみれば、受講者の皆様は課題文について丹念に辞書を引いて一字一字のニュアンスを探り、ご自身の人生経験を踏まえて深く内容について思索され、むしろ私の方が刺激を受けて勉強になる日々を過ごすことができました。漢文が一つの外国語である以上、語学的な正確性が重要な軸となるのですが、それだけに留まらず、自分はこの作品にどう向き合うのか、というむき出しの勝負を受講者の皆さんが挑んでくださったことは、生涯忘れることのない思い出です。

今年度は、対面・オンラインを併用して三名の受講者様を迎え、劉大櫟「縹碧軒記」・曾鞏「唐論」・『夷堅志』・『晋書』孝友庾袞伝・蘇軾「書東臯子伝後」・同「潮州韓文公廟碑」・韓愈「鱷魚文」などを教材としてまいりました。色々なことがありましたが、一つだけ印象的だった出来事をご紹介します。

中国清王朝の文壇で大きな影響力をもった桐城派の代表作家の一人・劉大櫟（1698～1779）が父の書斎の思

出を語った「縹碧軒記」を扱った際、「右に樹うるに桐を以てし、左に植うるに蕉を以てし、吾が父 其の間に兀坐す。几席、衣袂 皆空青結緑の色と為す（右には桐を、左には芭蕉を植え、私の父はその中間に一人座っていた。机や敷物、着るものもすべて青緑の『主』のような色合いにしつらえていた）」という一節が登場しました。私がなんとなく、室内でまあ鉢植えのようにして植物を植えておったんでしょねえ、と申し上げたところ、ある受講者の方が、こうおっしゃいました。「いや、先生、それはおかしいですよ。桐も芭蕉もかなり大きく育って、鉢植えにできるような植物じゃないから、屋外に植えていたはずですよ。お父さんの座席の後ろに窓があって、そこから木々の葉を通した光が差し込んで、部屋全体が青々とした光に包まれていた



劉大櫟「縹碧軒記」

ことに情趣を感じたのではないのでしょうか。」

ご提示いただいた解釈から導き出される風景があまりにも魅力的で、漢文を読む時はただ字面を追うのではなくちゃんと表現していることを考えないといけない、と再認識し、大いに学ばせていただきました。このご発想



は、日頃家庭菜園をされ、お住まいの内装も色々と試行錯誤してこられた経験から生まれたとのことでした。今後漢文入門を受講される方も、少人数制でアットホームなこの授業の利点を生かし、是非お考えになったことを遠慮なく講師にぶつけ、漢文への理解を深めていただければと存じます。

後任の斎藤賢君は、気鋭の東洋史学研究者で、よく笑う好青年です。主として中国の戦国から秦時代、まさしく昨今漫画『キングダム』で注目されている時代の歴史を研究していますが、広く東洋文化全体に関心を寄せていることを日ごろの付き合いで感じており、また、漢文教育への強い情熱もっており、私は彼が皆様の好奇心の良き導き手となることを確信しています。

生まれ育った近畿を、そして学生生活を送った京都を離れることはとても寂しいのですが、山の学校については安心して斎藤君に後を任せ、京都出張のついでに酒でも酌み交わしながら、「山の学校どない？おもしろやっとう？」と尋ねる日を早くも楽しみにしております。

●『漢文入門』クラス紹介 斎藤 賢

はじめまして。今年度より「漢文入門」講座を担当することになりました、斎藤賢です。この講座では『史記會注考證』を主なテキストとして読み進めていく予定です。司馬遷の『史記』は日本において最も著名な歴史書であると言っても過言ではなく、ご存じのかたも多いことかと思われそうですが、『史記會注考證』という書名は見慣れないものかもしれません。瀧川亀太郎博士の手になり、1932年から34年にかけて刊行されたこの書には、南朝宋・裴駰の『集解』、唐・司馬貞の『索隱』、および張守節『正義』（これらは「三家注」と称されます）に加え、瀧川博士が清朝考証学者や江戸時代の学者の説なども取り込んで書いた「考證」が附されています。『史記』といえど翻訳書も多数出版されており、あるいは、いまさら『史記』なんて...と思われるかたも、おられるかと思えます。しかし、歴代多くの注が作られてきたことからわかるとおり、『史記』は決して簡単な書物ではありません。『史記』の文章の正確な意味や、細かなニュアンスなどは自身で原文（と注釈）を読み、考え、理解するしかない、といえるでしょう。古代から近代にいたる中国や日本の読者とともに『史記』を読み解くことができる、その意味において『史記會注考證』は非常に魅力的なテキストだと思えます。

授業に際しては、まず受講生の方のレベルに合わせて漢文法を解説し、その後テキストを読み進めながら、「反切」や「通假」「避諱」といった、実際に漢文を読むために必要な知識について説明していきます。『史記會注考證』のどの部分を読むかについては、受講生の皆さまのご関心に沿って決定したいと思います。また、主なテキストは『史記會注考證』としますが、『史記』にみえる説話については、それに関わる文章が『戦国策』や『呂氏春秋』『韓非子』といった他の書にも残されている場合があり、「そちらも読んでみたい！」といったご希望も大歓迎です。授業の形式としては、毎回、受講者の方にテキストを事前に読んできてもらい、授業では漢文の訓読、及びその日本語訳をしていただきます。その際、最も重視するのは漢文の文法が理解できているか否か、ということです。学校教育ではしばしば「～という字は～と読まなければいけない」といった教えかたをするかと思いますが、漢文の訓読の仕方はもっと自由なものであり、文法に合ってさえいれば、どのように訓読しても構いません（もちろん、漢文訓読の伝統は疎かにできません）。

また、この授業ではただ単に漢文を読めるようになる、ということだけではなく、その漢文の背景にある歴史や社会・文化などを理解する、ということも重視したいと考えています。そのため、関連する文献や考古学的遺物などもご紹介しつつ、『史記』の対象とした古代中国がイメージできるような授業を目指します。

漢文は決して無味乾燥な漢字の羅列などではありません。とりわけ『史記』は上古の聖王の治世に始まり、殷周の交替、春秋の覇者、戦国の烈士、楚漢の死闘などを叙述し、さながら大河ドラマのような迫力もっています。また、『史記』の魅力として、人間という存在に対する鋭い洞察が挙げられるでしょう。例えば、伯夷叔斉列伝では、伯夷叔斉が義を貫いて終には首陽山で餓死したことを記した司馬遷は、一方では非道な人物が一生楽しく豊かに暮らしているのに、他方では正直に真面目に生きている人間が災禍に遇うことを述べ、「余甚だ焉に感う。儻は所謂天道、是なるか非なるか。」（「余甚惑焉、儻所謂天道、是邪非邪」）と問うていますが、この嘆きには現代であっても多くの方が共感を持たれるのではないのでしょうか。これは一例にすぎませんが、『史記』には読者を思索に導いてくれる内容に満ちています。

些か煩雑になりましたが、この講座の目的は「漢文を楽しく読む」ことに尽きます。受講生の方が、ご自身で『史記』を読み、考え、理解し、それらを人生の糧としていただくことができれば、望外の喜びです。



フランス語講読 A の授業は、昨年から引き続き哲学者アンリ・ベルクソン (Henri Bergson 1859-1941) の『意識に直接与えられるものについての試論 *Essai sur les données immédiates de la conscience*』(1889) を読んでいます。この原稿執筆の段階で最終章の終盤に差し掛かっており、春学期には新しいテキストに入るかと思います。何になるかはまだ決まっていないのですが、決まり次第山の学校の Web サイト等でお知らせしたいと思います。またフランス語講読 B の授業は現在休講中なので、フランス語で読んでみたい本やテキストがある方はお気軽にお問い合わせください。進行ペースなどは調整いたします。



さて、前回の『山びこ通信』ではベルクソン独自の時間概念である「持続 *durée*」について書きました。今回は、その持続が自由とどう関係するのかについて考えてみたいと思います。

自由とは何でしょうか。あるいは私たちが自分は自由であると考えるのはどのような場合でしょうか。自分がしたいように行動できる時でしょうか。例えば、多くの人は腕を上げようと思えば上げられるし、仕事や学校に行くのが嫌ならば行かないこともできます。もちろん無断で学校や仕事を休めば、叱られたり、罰を受けたりすることもあるでしょうが、おそらく多くの人が自分の思うように行動できる状態を自由と考えるのではないのでしょうか。この意味で自由とはきわめて単純な事実であると言えます。それではこの自由は、時間とどう関係するのでしょうか。

それはまず、時間は逆戻りすることはできないということと関連します。過ぎ去った時間を元に戻すことができないというのは誰もが人生のうちで経験していることでしょう。後悔という感情は、時間を戻すことができないという無力感から生まれるのだとも言えます。しかしベルクソンによれば、自分が行ったものとは別の行為を行うこともできたと考えるのは、ある行為を行った後で、時間の流れを線として、つまり空間的なものとして思い描く場合だけです。時間の流れを線のように考えてしまうから、私たちは事後的に、ある一点で別の方向へと分岐できたかもしれないと考えてしまうのです。実際、ベルクソン以前の哲学者は、自由を実際に行ったものとは別の行動をすることもできたという意識に帰していました。しかしそのような意識は、暗に時間を空間的にとらえてしまっているのです。

また、逆戻りできないと言うことと同様に、時間においては同じ現象が 2 回生じるということもありえません。毎日同じことを繰り返しているように見えたとしても、厳密には昨日と今日のあいだには一日分の時間が流れています。この流れた時間の分だけ、私たちは変化しているのであり、まったく同じ現象は意識に関するかぎり起こりえません。したがって、ある行為の内的な原因を知ることは、その行為を行った時点でのその人になることであり、それは不可能であるとともに不条理です。

かくして空間と明確に区別される時間は、不可逆で、その一瞬一瞬が私たちの人格を形成するもだということになります。そしてベルクソンが考える自由とは、このような空間と区別される時間、すなわち持続から帰結するような行為のことなのです。したがって、ある意味では私たちはつねに自由であるとも言えますが、しかしこの自由にもさまざまな度合いがあるということにもなります。単に習慣になっているという理由で行う行為もあれば、他者に命じられているから行う行為もあります。やらなければいけない仕事があることもあれば、身体的に不可能なこともあるでしょう。ベルクソン自身も自由には度合いがあるということを認めており、真に自由な瞬間とは稀なものであるとも言います。そして真に自由な行為とは、芸術作品のようだと付け加えています。



この意味でベルクソンにとって自由であることと創造的であることは結びつくのですが、彼は後にこの創造的なエネルギーを生物の進化のうちに見いだすこととなります。それこそが後の『創造的進化』(1907)の主題となる事柄なのですが、それはまた別の話です。

フランス語講読 A の授業ではかなり長きにわたってベルクソンを読んできましたが、それも今回の『意識に直接与えられるものについての試論』で終わりになる予定です。冒頭にも書いたように、次のテキストは決まり次第お知らせしますので、興味がある方はお気軽にお問い合わせください。フランス語講読 B の方も随時募集していますので、よろしくお願いたします。

『0から1へのフランス語入門』 『初級フランス語（文法）』A・B

担当 谷田利文

担当しているフランス語の講座では、少人数制をいかして、受講される方の要望に沿った内容にすることを心掛けています。

「0から1へのフランス語入門」では、問題を多く解いて記憶の定着を図りたいという要望から、問題数の多いテキストを選びました。講座の始めには、動詞の活用を確認し、つまずきの原因ともなりうる動詞の活用に少しずつ慣れていってもらえればと思っています。クラスでは、demi という単語が出てくれば、デミタスコーヒーの由来（demi 半分、tasse 杯）について話すなど、時に脱線しながら、気軽に質問などができるような雰囲気作りを心がけています。このクラスは、全くのゼロからフランス語を学ぶものですので、興味がある方は、どなたでも参加していただければと思います。

「初級フランス語（文法）A」では、短期間でしたが、社会人を経て大学院に入り修士論文を準備されている方が受講され、論文で扱う19世紀末の書簡集と一緒に読み、研究のサポートを行いました。このような特殊な要望に応えられる点が、少人数制の利点だと思っていますので、気軽に相談していただければと思います。

その後、コロナで休止されていた方が復帰され、文法の学習を一通り終え、現在は、文法の復習と、要望のあった、モーリス・ブランショの『文学空間』の講読を並行して進めています。クラスでは、まずブランショの複雑な文章を、() や [] の記号を使い、S（主語）やV（動詞）、O（目的語）など、核となる文章の構造を示し解説します。その後は、内容の解釈に入りますが、ここでは受講されている方と自由に意見を交わし、ブランショの思想を解釈することを楽しんでいます。

「初級フランス語（文法）B」では、要望のあった読解のためのテキストから、ラ・ロシュフーコー、ル・クレジオ、アゴタ・クリストフ等の文章を選び一緒に読み、現在はコレットの『牝猫』の講読を行なっています。上流階級の生まれであるアランと、奔放なその恋人カミーユ、この若い二人のカップルに、アランの飼い猫サアを加えた二人＋一匹が主要な登場人物になっています。カミーユの美しさには惹かれながら、性格や行動には育ちの違いを感じてしまうアラン、そして、サアの鳴き声に対し（それはまさに猫撫で声なのですが）、「盛りがついてるのよ」と嫉妬心を覚えるカミーユ。このような三者の関係や、コレットの繊細な情景描写が非常に興味深く、楽しみながら読解を進めています。



どのクラスにも言えることは、受講される方の知的な好奇心や向上心の高さです。しかも、それぞれが学ぶ喜びや、詩や小説などの創造的な仕事に生かすために、フランス語を学ばれています。講読のクラスでは、受講されている方がフランス語で読みたいという本を選んでいるため、フランス語を教えるという一方通行ではなく、その文章を解釈する、味わうという点では、刺激を受けることも多く、充実した時間となっています。

『イタリア語入門』『イタリア語講読』

担当 柱本元彦

イタリア語入門クラスと講読クラスを担当しています。入門クラスに参加していらっしゃるのにはイタリア留学を計画している中学一年生と彼女のお母さまで、いつもとは違った対応をしなくてはならないのが、難しくもありますが新鮮でもあります。最近では大学でも英語の基本文法を前提にできないケースがあり、やり方を見直す機会かなとも思っています（英語の基礎力のない大学生を認めるのはマゾヒスティックな気もしますけれど）。イタリア滞在経験者のお母さまの質問には時折たじたとありますが、このフォローがまたペースの調整にもなって、暗中模索ながらも進んでいるところです。順調にいけば、もうすぐ人称代名詞・近過去・半過去の山を越えることができ、そうするとさまざまなシーンに立ち向かえる幅がぐっと広がります。ただ何よりも励みになるのが現地を体験することですから、いつイタリア旅行ができるのかも分からないコロナ状況は辛いですね。

講読クラスは、前回の初級クラスのもち上がりです。初級クラスでは比較的易しい短編集を読みながら文法事項を確認していきました。講読クラスの

